
中学校国語科における叙述に即した読みを身につけさせるための指導の工夫

－質問作りを基盤とした学習方略の使用を通して－

阿部 明子

(児童生徒支援コース 13502001)

1. 問題

(1) 現状

①全国的な傾向

文部科学省(2006)は2000年と2003年のPISA調査を分析した結果、読む行為のプロセスとしての「情報の取り出し」、「解釈」、「熟考・評価」の3つの観点のうち、日本の子どもたちは、「解釈」、「熟考・評価」に課題があるとしている。「解釈」とは書かれた情報から推論して意味を理解することで、「熟考・評価」とは、書かれた情報を自らの知識や経験に位置付けることである。

これらの問題をふまえて、2008年の「中学校学習指導要領」の改訂では、自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視して、「読むこと」の指導事項は、語句の意味の理解、文章の解釈、自分の考えの形成という学習過程をふまえて設定された。

②日頃の授業からの考察

中学校の現場で国語の授業を行なってきた、生徒が正しく教材文を読めていないのではないかと感じる場面があった。

一つ目は「語句の意味の理解」である。授業中に教材文を音読させると、既習漢字でも読めなかったり、ひらがな表記であっても正しく区切って読めなかったりすることがある。一人で教材文を黙読する場合、読めない漢字やよくわからない言葉や表現を、そのまま飛ばして読んでいるのではないかと考えられる。大雑把な読みのために推論を誤り、語句を間違えて解釈してしまうことがある。

二つ目は「文章の解釈」についてである。調べ学習などのとき、自分で要点をまとめられず、資料を丸写しにしていることがある。自らポイントを押さえて文章の内容を理解しようとしのではないかと予想できる。教師の発問に対しても、教材文のどこを読んだらよいのか、手掛かりとなる言葉を探せないことがある。

三つ目は「自分の考えの形成」についてである。初読の感想や学習後の感想を書かせても、なかなか自分の考えをもてない生徒がいる。

③NRT検査の結果から

平成25年4月に行なわれたNRT検査の、1年生から3年生の結果により分析した。

「語句の意味の理解」で通過率が低かった(60%未満)のは、比喩表現の問題、擬人法の問題、適語補充の問題であった。

「文章の解釈」で通過率が低かったのは、段落構成の問題、要点を読み取る問題、文章の展開を読み取る問題、叙述に即した読み取りの問題、登場人物の心情理解の問題であった。

これらから生徒の読解に関して、語句が正しく理解されなかったり、叙述に即した読み方が不十分であったりすることがわかった。そのため、要点をまとめたり、登場人物の心情を理解したりするのが苦手なのではないかという実態が浮かび上がってきた。

(2) 読解方略

①読解方略とは

文章を理解するときに、読み手が自分の読解プロセスをより効果的にしようとして行なう行為を、読解方略という。例えば、文章を読みながら、よくわからないところを繰り返し読んで理解しようとしたり、大事なところに線を引きながら読んだりすることである。この読解方略に関する研究を生かして授業を構想することで、生徒が読解で抱える課題の解決になるのではないかと考えた。

②読解方略に関する研究

清河・犬塚（2003）は、説明文の読解を苦手とする中学2年生男児に「相互説明」という指導枠組みを提案した。その結果、読み方、質問の仕方の例を与えられ、それを用いることで読解方略を自ら用いて、文章を適切に解釈できるようになった。

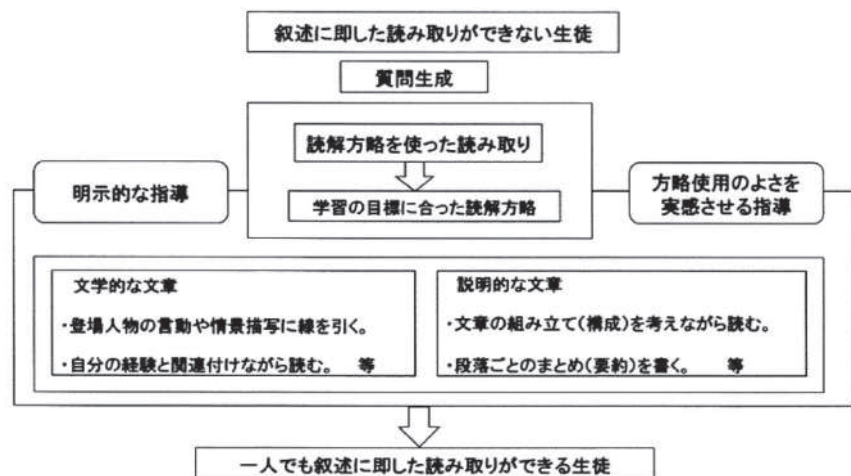
秋田（1988）は、質問作りが説明文の読解にどのような効果をもたらすかの研究を行った。その結果、質問作成を経験させることが、自分で要点把握ができるようになるための援助となることがわかった。

佐藤（2012）は、「もし〇〇ならば、どうなるか？」と仮定して考える読解方略を「仮定スキル」と名付けた。そしてこの「仮定スキル」の文型を意識させて活用をはかる、よさを実感させるなどの段階を経た結果、多くの生徒にスキルの転移が図られた。

(3) 実践に向けて

①研究の構想

以上の先行研究から、右図のような構想を立てた。叙述に即した読み取りができない生徒に対して、全ての教材で質問生成を使い、質問の答えを考える過程で教材文の目標に合



った読解方略を使って、読解の授業を行なう。そのときに、読解方略を明示的に指導し、なおかつ読解方略のよさ（有効性）を実感できるようにすることで、生徒は一人でも叙述に即した読み取りができるようになるのではないかと考える。

②実践の流れ

国語科の授業の中で、生徒が質問作りの経験はあまりなかったといえるだろう。そこで、教科書の教材文を使った学習に入る前に、簡単な教材文を用いて質問の練習を行なう。質問の形としては「どうして～か。」「～とは何か。」という2つの形を基本とする。

また、教科書に載っている教材文であっても書き込みがしやすいように、余白を十分にとったワークシートを用意する。そして個人での質問作りをした後、4～5人のグループになり、協同学習によって質問を練り上げ、クラス全体で交流する。その後、生徒から出された質問をもとに、内容を読み取るという授業を継続していく。授業の中で取り上げる読解方略は、繰り返し使うことで定着を図っていく。

2. 実践

(1) 実践の対象

本実践は、勤務校第1学年の4学級123名を対象として、平成26年度に実施した。

(2) 実践の概要

①質問作りの練習『風切るつばさ』（文学的な文章）（4月実施）

小学校6年生の教材を使って質問作りの練習を行なった。「どうして～か。」「～とは何か。」という2つの質問の形を紹介した。それから教材文を印刷したワークシートの、疑問に思ったところに傍線を引き、右隣に「どうして～か。」「とは何か。」と書き込ませた。個人で作った質問をグループで3つに絞り、B4の発表用紙を黒板に貼ってクラス全体で整理した。

②授業実践その1『にじの見える橋』（文学的な文章）（4～5月実施）

主人公が中学生で生徒たちが親しみやすく、文章表現もわかりやすい短編の物語である。学習目標は、登場人物の気持ちを推測し、主人公の気持ちの変化を捉えることである。「少年の意図とは何か。」「どうして自分のことを恵まれた存在だと思ったのか。」など、学習目標に迫るような質問が各クラスから出された。あるクラスでは題名についての質問や、二つの場面での「足踏み」からわかる主人公の気持ちを比べる質問も出た。その一方で「どうして雨がやんだのか。」のように、本文に答えが書かれていなかったり、叙述から答えを推測できなかつたりする質問もあった。出された質問を全部使おうとクラスで違うワークシートを作ったが、一問一答の授業になってしまったので、今後質問の取り上げ方の工夫が必要であると感じた。

③授業実践その2『ちょっと立ち止まって』（説明的な文章）（5～6月実施）

3枚のだまし絵を使い、絵を手掛かりにすることで構成がわかりやすい説明文である。学習目標は段落と段落の関係に注意し、文章の構成を読み取ることである。

初めての、説明的な文章での質問作りであった。そこで「どの説明文でも使える質問」と「説明文の内容に関する質問」を紹介した。「どの説明文でも使える質問」は全部で7つあり、「序論・本論・結論はどこか。」「中心となる文はどこか。」などがある。文学的な文章のときとは違って質問作りに苦戦する生徒が多かった。しかし生徒たちの中から、「このこととは何か。」など指示語に関する質問が出ていて、読み取りに有効だった。この実践では、「どの説明文でも使える質問」によって学習目標に迫る読み取りが行なえた。そのためにも、「大切な文に線を引く」などの読解方略が活用できた。

④比喩に着目させた質問作りの練習『雪とパイナップル』（文学的な文章）（7月実施）

読書教材であり長い教材文であったが、比喩表現がたくさん使われていたので、一部分だけを質問作りに使用した。2学期の実践に情景描写に着目する読み取りが出てくるので、それに備えて比喩表現に着目した質問作りを練習した。

ここではワークシートの改善を行なった。個人のワークシートで質問を作るときには付箋を使い、グループでまとめるためのワークシートに付箋を貼らせた。その結果、どこに質問が集中しているか視覚的にわかりやすくなり、付箋に記名することで意見交流に役立っていた。多くの生徒が比喩表現に着目した質問を作っていた。

⑤情景描写に着目させた質問作りの練習『大造じいさんとがん』（文学的）（9月実施）

2学期に学習する文学的な文章の読解では、情景描写に着目した心情の読み取りをさ

せる予定であった。そこで、生徒たちが5年生のときに学習した『大造じいさんとがん』を使って、情景描写について学習した。まず情景描写という言葉の意味や用法の説明をした。その後「東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。」という部分を示し、ここには大造じいさんのどういう気持ちが表れているか考えさせた。それから、他の部分から情景描写を探し、大造じいさんの気持ちを考えさせた。3分の2くらいの生徒が正しく探し、心情を読み取れていた。

⑥授業実践その3『星の花が降るころに』（文学的な文章）（9月実施）

主人公が中学1年生であることから、生徒たちが親しみをもって読める物語である。学習目標は、登場人物の気持ちや場面展開、情景描写に注意しながら作品を読み取ることである。

質問作りでは情景描写に着目させ、グループで必ず一つは情景描写にかかわる質問を出させた。そのとき情景描写の質問は、発表用紙の色を変える工夫をした。他の質問も、登場人物の言動に関わる質問は発表用紙に（言）を、それ以外は（他）を記入させ、質問の分類を図った。

登場人物の言動や、情景描写に着目した質問から、登場人物の心情を読み取るという学習目標に迫ることができた。また、ここでは主人公が生徒たちと同じ中学1年生ということで、「自分の経験と関連付ける」という読解方略を使って、心情理解に役立てた。

⑦授業実践その4『大人になれなかった弟たちに……』（文学的な文章）（10月実施）

太平洋戦争を背景にした物語である。学習目標は、登場人物の行動や情景描写に着目して読み、登場人物の気持ちや作者の思いをとらえることである。

この物語でも、情景描写が出てくる。特に物語の山場では心情理解のために必要となるので、教材文の中から探させたかった。質問作りにも慣れ、情景描写に着目するのも初めてではないので、比較的短時間でグループでの質問を整理することができるようになっていた。また、着目してほしい部分にも着目できるようになり、どのクラスからもじような質問が出されるようになった。どのクラスでも質問作りの力がついてきた。

物語の山場では、母親の言葉と情景描写から、「僕」の弟ヒロユキの死に対する母親と「僕」の心情を読み取らせたかった。しかし、生徒からの質問をうまく生かせず、いきなり難しい問いかけをしてしまったため、生徒たちに思考の停止が起きた。そのクラスで作られた質問を取り上げ、段階的に核心に迫る質問へと展開する必要があった。

情景描写にこだわり、特に読解方略を使うことはできなかった。

⑧授業実践その5『流水と私たちの暮らし』（説明的な文章）（11月実施）

流水は私たちの暮らしとも深くつながっているという説明文である。図表が多用されており、本文と照らし合わせて読むことで理解が深まる。学習目標は、文章の中心となる部分を読み分け、筆者の述べていることを読み取ることと、図表と照らし合わせて本文を理解することである。

1学期に学習した「どの説明文でも使える」を使ったグループは少なく、それよりも比喩表現に着目した質問が多かった。文学的な文章で比喩表現に着目してきたことからの、学習の転移と考えられる。比喩表現に着目した質問をもとに、読み取りを深めることができた。また、ここでは「簡単な図や表をかく」という読解方略を使い、叙述をもとに図で表すことは読解に有効であった。

3. 検証

①全国学力・学習状況調査を用いた検証

5回の授業実践の後に、全国学力・学習状況調査を用いた検証テストを実施した。題材・内容・出題の意図等を参考に、学習した教材の学習目標や使用した読解方略と関連のあるものから選んだ。

授業実践その3の後に行なった、文学的な文章の比喩に関する問題では、比喩表現に関する質問作りの継続により、全国よりも高い正答率を得られた。

また、授業実践その5の後に行なった、説明的な文章の内容に関して Q&A の形にする問題では、他県が 50 %未満の正答率のところ、本校では 80 %近い正答率であった。

②アンケートによる検証

質問作りや読解方略の使用について学習する前と、各授業実践の後、読解方略に関するアンケートを行なった。しかし、評定値は一貫して低いという結果となってしまった。「教科書に載っている物語（説明文）を一人で読むとき」と問うたためと考えられ、「授業で教科書の教材を読むときに」とすればもう少し結果が違ってきたのではないか。

③グループ毎にまとめた質問による検証

2回目までは、読み取りを深めるのとは直接関係のない質問が出されたが、徐々に減っていった。また徐々に、教師が読み深めてほしい核心に着目できるグループが増えた。授業実践5の説明的な文章では、比喩表現に着目した質問が多く出され、これは文学的な文章で繰り返したことの学習の転移と考えられる。

4. 考察

4～11月の約半年間にわたって質問作りを行なってきた。個人で作った質問をグループで3つに絞り、その後クラス全体で整理するという形を継続した。その結果、読解に有効な質問とそうでない質問の判別が徐々にできていった。有効な質問を作るために着目した叙述は、実は文章を読み取るためのキーワードになっている。これは生徒たちが苦手としていた、ポイントを押さえたり、ある言葉を手掛かりにしたりして読むことが、質問作りを通して向上したと考えられ、他の教科にも生かせることが考えられる。

また、比喩表現や情景描写にこだわった質問作りも継続した。その結果、問題集の文学的な文章を読む際に「心情を表す言葉が少なかったので、情景描写に着目して心情を考えた。」と振り返る生徒もいて、学習の転移が認められた。

読解方略については、「簡単な図や表にかく」など、それまで生徒たちが自らやらなかったことを学習活動に取り入れた。同じ方略を繰り返し使い、慣れ、なおかつ自分でよさ（有効性）が実感できると、自らの読みに生かせることがわかった。

引用文献

- 秋田喜代美（1988）. 質問作りが説明文の理解に及ぼす効果 教育心理学研究, 36, 307 - 315.
- 犬塚美輪（2002）. 説明文による読解方略の構造 教育心理学研究, 50, 154 - 157.
- 犬塚美輪（2010）. 文章の理解と産出 市川伸一（編） 現代の認知心理学 5 発達と学習 北大路書房 pp.201 - 226
- 清河幸子・犬塚美輪（2003）. 相互説明による読解の個別学習指導 教育心理学研究, 51, 218 - 229.
- 佐藤佐敏（2012）. 読みの方略は転移するのだろうか 井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也（編）
論理的思考を鍛える国語科授業方略中学校編 溪水社 pp.146 - 159